令和８年度　表彰者紹介・授賞理由

木村賞

坪田 勝次（武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園）

長年にわたり薬用植物を中心とした展示・栽培・研究・普及活動に従事し、その成果を植物園協会誌等で継続的に発信してきた。

チョウセンアザミの展示栽培、シンガポール植物園の事例紹介、トウシキミの開花結実に関する研究、バニラの栽培展示の確立、2 度にわたるショクダイオオコンニャクの開花実現、文化庁が推進する「文化財の匠プロジェクト」への参画など、その業績は多岐にわたり、植物園事業の発展に大きく貢献してきた。

以上の功績は特に優れたものであり、木村賞に値するものである。

植物園功労賞

辻本 穣（大阪公立大学附属植物園）

1997 年から植物園に勤務し、樹木を中心に育成管理・繁殖・栽培に卓越した専門性を発揮、入園者の対応及びガイドツアーなども務めてきた。また、2016 年からは絶滅危惧種の栽培・調査収集に精力的に取り組み、水辺環境の急減という社会的課題をいち早くとらえて湿生植物エリアの育成展示にも尽力した。2024 年からは若手の育成も手がけ、研究・展示公開を目的とした大学付置植物園の発展に寄与してきた。現在も絶滅危惧種の担当として、外部団体と連携し希少種の保全に尽力し続けている。

以上の功績は、植物園功労賞に値するものである。

高田 正（兵庫県立フラワーセンター）

兵庫県立フラワーセンターにおいて、40 年以上にわたり、樹木園管理、花壇管理など植物に関する業務のほか、ウィーピング仕立てによるバラの大鉢の展示を行うなど植物園事業に尽力してきた。定年退職後、参事として後進の指導にも力を入れ、また一般市民を対象としたバラの剪定、接ぎ木実習、樹木医として県下都市公園の危険木および樹木生育調査などにも積極的に取り組んでいる。さらに、神戸市岡本地区に伝わる希少品種「重五郎梅」など貴重な植物の保全活動も行っている。

以上の功績は、植物園功労賞に値するものである

坂﨑奨励賞

堀川 大輔（広島市植物公園）

平成 29 年に広島市植物公園に配属され、リニューアルされた大温室の担当者として熱帯植物等の栽培・展示に関わり、日本国内最大幹周のオーストラリアバオバブの生態解明を進め、新しい知見を日本植物園協会の研究発表会や広島市植物公園紀要及び栽培記録等で発表した。また、アリ植物やビカクシダの仲間を収集し、企画展の開催に取り組んだ。さらに令和5年度からは屋外の樹木を中心とする担当として、開園 50 周年を間近に控える園内の樹木等の健全な生育環境づくりに取り組むなど、将来の植物園をけん引することを大いに期待しうる若手人材の一人である。

以上の功績は、坂崎奨励賞に値するものである。

保全・栽培技術賞

「オキナワセッコク種子保存条件の検討」

徳原 憲、佐藤 裕之、阿部 篤志（一般財団法人沖縄美ら島財団）

オキナワセッコクの種子保存のための条件を検討し、液体窒素による凍結保存が有効であることを見いだし、「保存温度及び保存期間がオキナワセッコク種子の発芽に及ぼす影響」を日本植物園協会誌 59 号に発表した。

以上の功績は、保全・栽培技術賞に値するものである。

「植物園におけるカシノナガキクイムシ対策」

二階堂 太郎、細矢 剛（国立科学博物館筑波実験植物園）

升屋 勇人、髙橋 由紀子（国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所）

ナラ枯れを引き起こすカシノナガキクイムシ防除に関する包括的な対策を筑波実験植物園で実施し，各対策法についてその有効性と課題などを明らかにして「筑波実験植物園におけるカシノナガキクイムシ対策の事例」を日本植物園協会誌 59 号に発表した。

以上の功績は、保全・栽培技術賞に値するものである。